

# 光の伝搬(1)

波多腰玄一

## 1 はじめに

光エレクトロニクス<sup>1)</sup>が関わる様々な分野でシミュレーション技術は重要な役割を果たしている。本連載では、いろいろなシミュレーションについて、その基になる物理モデルの概略と簡単なシミュレーション例を紹介していく。また実際にシミュレーションの動作をみることができるように、表計算レベルでできる計算例を紹介する。第1回は光の伝搬の基礎として、平面波を取り上げる。

## 2 電磁波とマクスウェル方程式

光は電磁波であるから、まず電磁波の基本となるマクスウェル方程式<sup>2~4)</sup>から始めよう。電磁波の電界 $\mathbf{E}$ と磁界 $\mathbf{H}$ は以下のマクスウェル方程式の解として与えられる。

$$\nabla \times \mathbf{E} = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} \quad (1)$$

$$\nabla \times \mathbf{H} = \mathbf{j} + \frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t} \quad (2)$$

$$\nabla \cdot \mathbf{D} = \rho \quad (3)$$

$$\nabla \cdot \mathbf{B} = 0 \quad (4)$$

ここで $\mathbf{j}$ は電流密度、 $\rho$ は電荷密度である。また $\mathbf{D}$ は電束密度、 $\mathbf{B}$ は磁束密度で、 $\mathbf{E}$ 、 $\mathbf{H}$ との関係は、誘電率 $\epsilon$ 、透磁率 $\mu$ を用いて

$$\mathbf{D} = \epsilon \mathbf{E} \quad (5)$$

$$\mathbf{B} = \mu \mathbf{H} \quad (6)$$

で与えられる。

まず $\mathbf{j}=\mathbf{0}$ 、 $\rho=0$ の場合を考えると、式(1)~(4)より以下の波動方程式が得られる。

$$\nabla^2 \mathbf{E} - \epsilon \mu \frac{\partial^2 \mathbf{E}}{\partial t^2} = 0 \quad (7)$$

$$\nabla^2 \mathbf{H} - \epsilon \mu \frac{\partial^2 \mathbf{H}}{\partial t^2} = 0 \quad (8)$$

正弦波は式(7)あるいは式(8)の解である。光（電磁波）の角周波数を $\omega$ とすると、

$$\mathbf{E} = \cos(\mathbf{k} \cdot \mathbf{r} - \omega t), \sin(\mathbf{k} \cdot \mathbf{r} - \omega t), \exp(\pm i[\mathbf{k} \cdot \mathbf{r} - \omega t]) \quad (9)$$

はいずれも式(7)の解である。上式中の $\mathbf{k}$ は波数ベクトルで、式(7)より

$$k \equiv |\mathbf{k}| = \omega \sqrt{\epsilon \mu} \quad (10)$$

である。また式(9)から、電磁波の進む速度 $u$ は

$$u = \omega / k = 1 / \sqrt{\epsilon \mu} \quad (11)$$

で与えられる。真空中では